

永井遺跡発掘調査報告書

～都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

1993.3

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団

例　　言

1. 本書は善通寺市埋蔵文化財発掘調査団が都市計画道路大通線改良工事に伴う事前調査として実施した「永井遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本事業は善通寺市長眞鍋 勝から善通寺市埋蔵文化財発掘調査団長 杉峰俊男への委託事業として実施された。組織は下記のとおりである。

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団

団長 杉峰俊男（善通寺市文化財保護協会会长）
副団長 香川政行（善通寺市文化財保護協会副会长）
調査指導 館庭 健（善通寺市教育委員会社会教育課長）
〃 尾上光正（善通寺市教育委員会社会教育課長補佐）
調査員 笹川龍一（善通寺市教育委員会文化振興室主事）

3. 本事業は平成4年9月25日から平成5年3月17日まで実施した。
4. 使用した方位は全て磁北である。
5. 本書の編集作成は調査を担当した善通寺市教育委員会文化振興室主事 笹川龍一が行い、遺構や遺物の実測には四国学院大学考古学研究会の協力を得た。

目　　次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史 -----	2
第二章 調査に至る過程 -----	8
第三章 調査の概要 -----	8
第四章 遺構と遺物 -----	9
第五章 まとめ -----	13
図　　版 -----	14

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する史跡天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊はあたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ古くから信仰の対象であった。その南には中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨白山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から



第1図 善通寺市全景

中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中樞的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小堀壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。統いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗

遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居跡・小兒壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多數の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小兒壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となつた。

ここから北方に広がる普通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居跡や小兒壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。

九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。ここから北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道普通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみると、いずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時頃の普通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

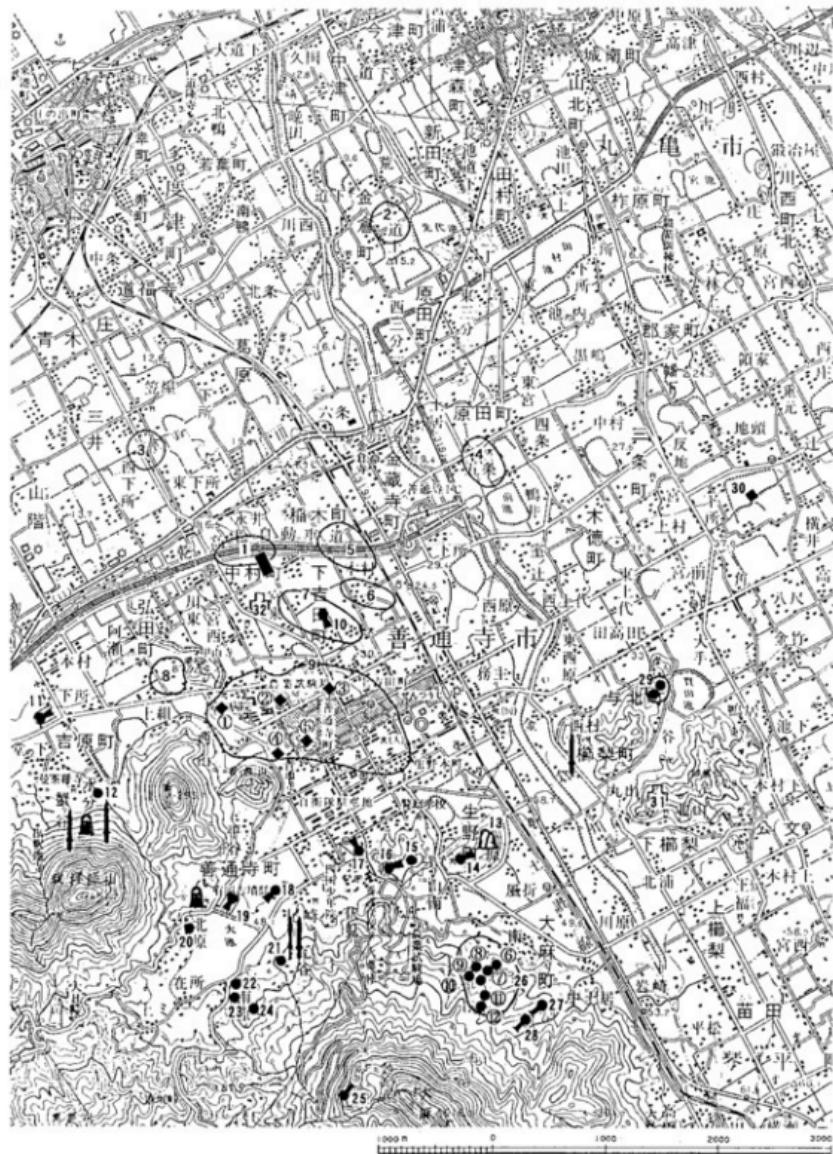
また、普通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍2口・細形銅劍5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅劍5口・銅鐸1口、北原シンネバ工遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

1. 水井遺跡	9. 旧練兵場遺跡群	12. 大塚池古墳	20. 北原古墳	⑨ 畑13号墳
2. 中ノ池遺跡	① 族ノ宗遺跡	13. 畠山山祭社遺跡	21. 瓦谷1号墳	⑩ 畑11号墳
3. 三井遺跡	② 仙遊遺跡	14. 畠山山古墳	22. 銀閣神社古墳	⑪ 大根岩1号墳
4. 五条遺跡	③ 仲村廃寺(白鳳)	15. 銀閣山頂古墳	23. 宮前尾古墳	⑫ 大根岩2号墳
5. 稲木遺跡	④ 普通寺西遺跡	16. 鶴狩4号墳	24. 宮前尾2号墳	27. 大麻山梅荷塚
6. 石川遺跡	⑤ 普通寺西御堂(奈良)	17. 丸山古墳	25. 野田院古墳	28. 大麻山藤原塚
7. 九頭神遺跡	10. 下吉田神社古墳	18. 王墓山古墳	26. 畠古墳群	29. 陣山古墳群
8. 甲山北遺跡	11. 齐藤古墳	19. 菊塚古墳	⑥ 畑5号墳	30. 生禪寺跡(白鳳)
			⑦ 畑6号墳	31. 橋梁城跡(中世)
			⑧ 畑10号墳	■ 調査地

▲:銅鐸出土地

■:銅劍出土地

◆:銅矛出土地



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

古墳時代に入つてもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、香色山・筆ノ山・我持師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓を中心に大麻山榎貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。

また、有岡地区的平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鐘子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴力峰2号墳（消滅）・鶴力峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の人々の生活の場は、後期を中心とした弥生時代の集落域と重複しており、旧練兵場遺跡をはじめ、普通寺市街地から北に広がる水田地帯で数多くの集落遺跡が確認されており、有岡地区を中心に各地に立派な古墳群を残した集団と各集落との関係が注目されている。

古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が独自の技術により灌漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者として生まれ変わり、有岡地区一帯に数多くの古墳を築いたが、この権力者（豪族）層は奈良時代には貴族層に変る。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓する考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺（伝尊寺跡）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500m程南に移転されたものが現在の普通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師（空海）が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎え、地名も寺名そのまま普通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道網が整備された。そして善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年3月
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月
～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～		
『中村・乾・上一坊遺跡』 第一冊	香川県教育委員会	1987年3月
『矢ノ塚遺跡』 第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稻木廃寺』 第六冊	香川県教育委員会	1989年3月
『永井遺跡』 第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章 調査に至る過程

普通寺市では四国横断自動車道路完成以後もこれに関連する都市計画道路等の建設が頻繁に行なわれている。主要な路線として市街地から北に向て整備が進む大通線南端では昭和62年に九頭神遺跡の発掘調査が行なわれ、弥生時代中期から後期、古墳時代にかけての集落遺跡が確認されているが、本年度は次期工事予定区間の事前調査が行なわれることとなった。

当該地区は今も方角地割が鮮明に残り、条里に係わる遺構が残されている可能性が高い場所である。また、四国横断自動車道路建設に伴い実施された発掘調査によって、内陸部では珍しく縄文時代後期から晩期にかけての遺構や遺物が多量に出土した永井遺跡に隣接している。

第三章 調査の概要

今回発掘調査が予定された場所は香川県埋蔵文化財調査センターが昭和59年から昭和61年にかけて発掘を実施した調査区に隣接していたことから参考となる資料が多数残されているが、このことから溝等の遺構が確実に統く範囲であることも知られていた。

調査区は現道や水路から安全な間隔をおいて設置し、北から順に第1～4調査区とし、第1調査区から発掘調査を開始した。

遺構面は県が報告している深度で確認できたが遺構は大小の溝が複合したものであり、しかも遺構面の起伏が著しく、全容を解明するためには調査区を部分的に更に地下げする必要が生じたが膨大な土砂の処理が必要となる。

そこで、遺構中に包蔵される遺物は非常に少なかったため、遺構の方位や時期等を特定するための最低限度の発掘面積にとどめ、当初の計画規模で円滑に調査を進めることとした。

検出された遺構と遺物については、次章で調査区ごとに解説する。



第3図 調査区配置図

第四章 遺構と遺物

第1調査区 ここでは南端から遺構の検出を開始した。地表面から50cm程で溝状の遺構が確認されたが、前述したように大小の溝が複合しており、調査区中央から北側は遺構面が下りながら起伏していた。そこで、上面から遺構群を把握することが困難と思われたため、5mおきに小トレンチを設定し断面観察を行い溝の流れや土層の堆積状況を調査した。

ここでは条里方位と平行に流れる3条の溝が確認された。確認順にSD-01～03としたが、南端での土層観察やそれぞれから出土した遺物などにより、SD-02とSD-03がほぼ同時期に機能し、SD-02埋没後にSD-01の流れが出現することが判明した。

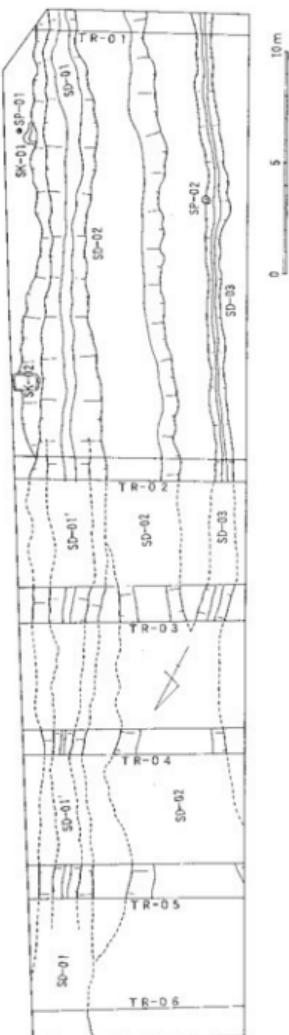
SD-01についても出現時とやや埋没した時点と二時期に亘り機能していたことが判明したため、古い流れをSD-01、新しい流れをSD-01'とした。

SD-01からは遺物は全く出土していないが、SD-01'からは11世紀代の土師器が数点まとまった状態で出土している。またその遺存状況等から人工的な排水路である可能性が高いと考えられる。

SD-02では埋土下層(砂礫)から弥生時代後期末頃の土器片や縄文時代後期から晩期にかけての土器や石器類が小量出土し、上層からは古墳時代後期頃の須恵器片がわずかに出土している。

SD-03は特徴的な埋土である暗黒色粘質粘土がSD-02と共に通する小規模な溝であり遺物は殆ど含まれていないが、小トレンチによる断面観察の結果調査区中央部でSD-02と合流することが確認された。

いずれの遺構も流れが直線的であるため人工的なものと思われるが、遺物が極めて少ないとから集落域からは距離があると考えら



れる。

調査区内では土坑(SK-01・02)や柱穴状の遺構(SP-01・02)も検出された。SK-01はSD-01以前のものでありその他は近世の所産であるが、いずれも性格は不明である。

また、第1調査区南西隅部には一部地山(黄褐色砂質土)がやや荒い砂混じりで灰色に変色する部分があり、ここから縄文土器片や石器が集中して出土している。

第2調査区 第1調査区で確認されたSD-01' とSD-01及びSD-02, SD-03の延長が確認されたが、SD-02とSD-03は第2調査区でその流れを南東に変える。

その他にSP-03～05, SK-03・04が検出されているがいずれも時期や性格は不明である。

第3調査区 調査区北東隅部を中心に大きくぼみが検出された。北東隅で地表面下3mまで掘削したが、中心部は更に深いようであり井戸などではなく天然の出水の可能性が高い。その埋土の様子からSD-01(SD-01')はここから延びることが判明した。

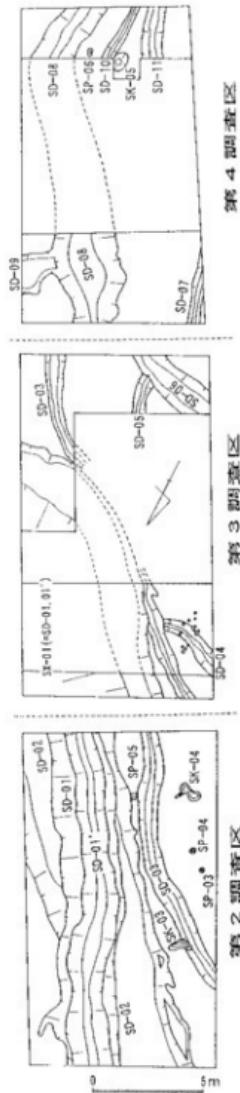
SD-02は調査区の東側を流れるらしくここでは確認されていないが、SD-03の延長は確認できている。

新たにSD-04～06が確認されたが遺物は全く出土せず詳細は不明である。SD-04部分では人の足跡が数個確認された。

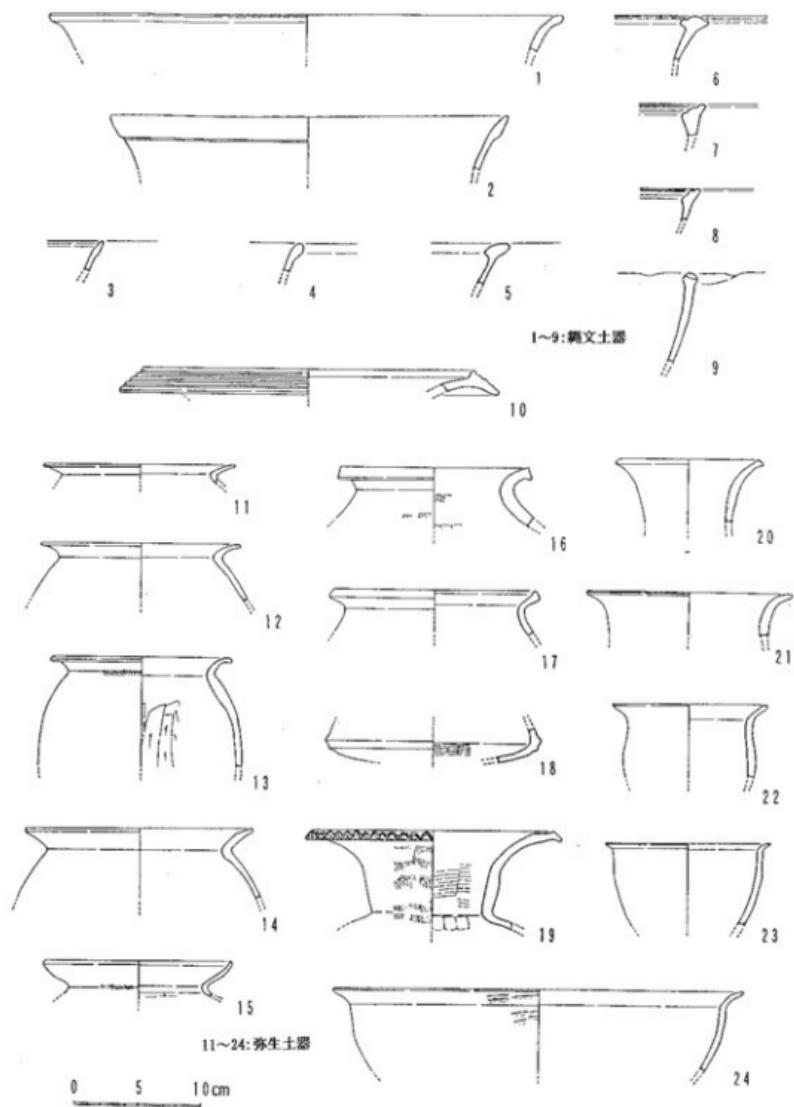
また調査区北西隅部で縄文土器片溜りが確認されたが、ここでは地山層と縄文の包含層が壁面で確認することができた。

第4調査区 ここでは新たに多数の溝(SD-07～11)やSK-05, SP-06が確認された。

SD-08とSD-09からは小量ながら弥生土器片が出土しており弥生時代後期頃の自然路と考えられるが、他の遺構からは遺物は全く出土しておらずその性格は不明である。

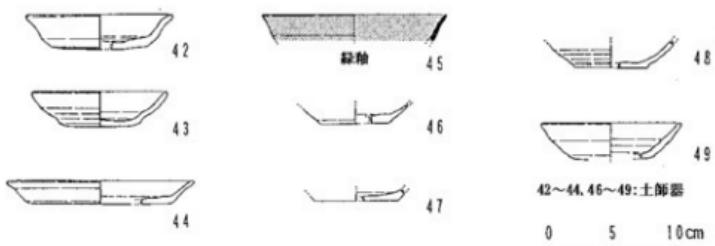
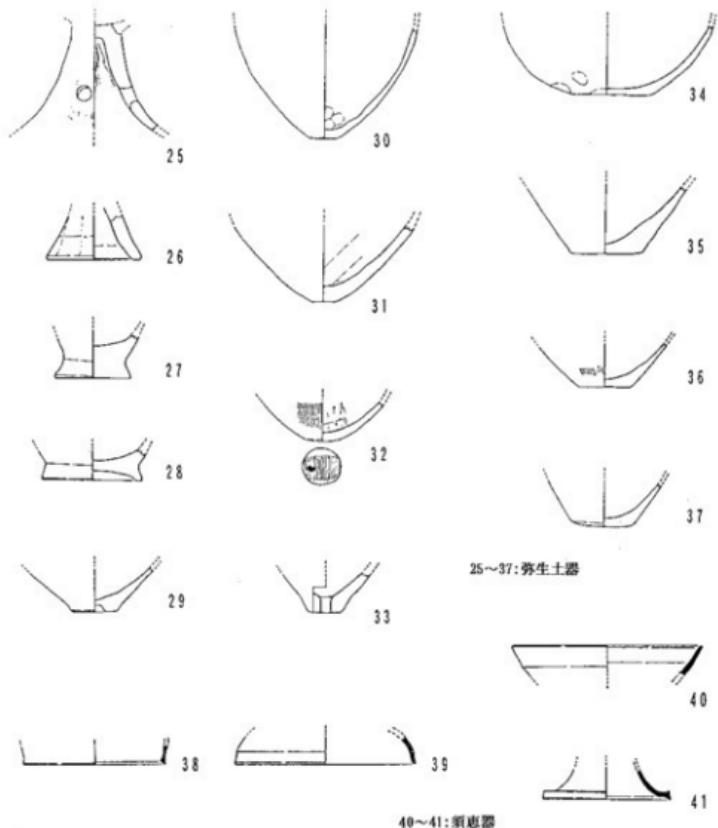


第5図 第2～4調査区平面図



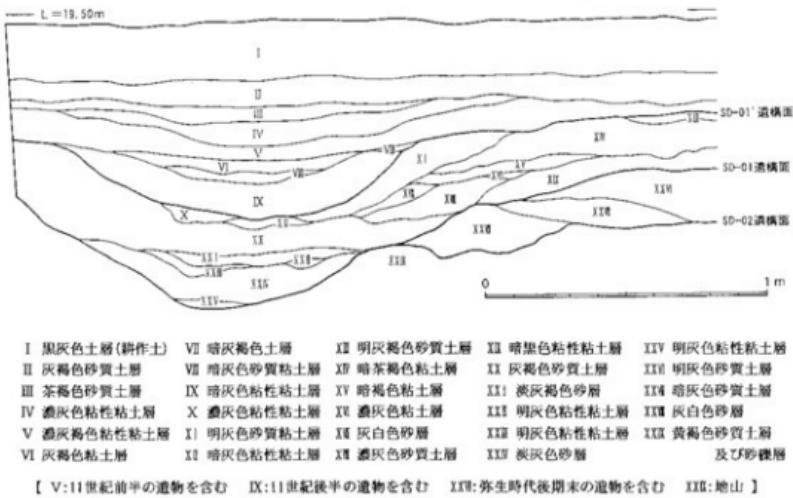
【1~9:第1調査区南西隅の地山直上包含層 10~24:SD-03最下層】

第6図 出土遺物実測図①



【25~37: SD-02最下層 38~41: SD-02上層 42~44, 46~49: SD-01' 最下層 44: SD-01' 中層 45~47: SD-03包含層】

第7図 出土遺物実測図②



第8図 SD-01及びSD-01' 土層堆積状況実測図 (第1調査区南壁)

第五章 まとめ

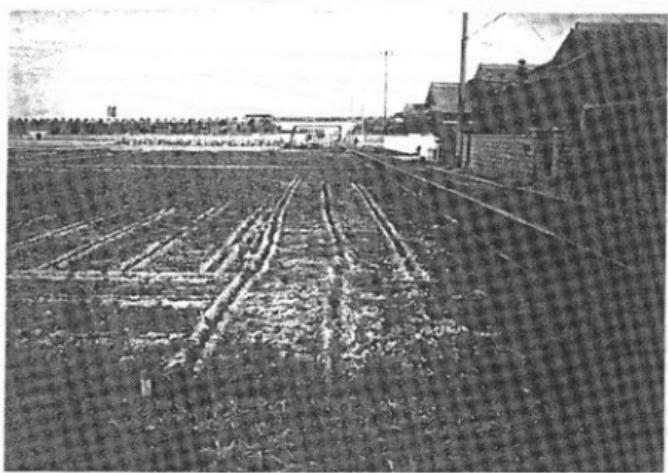
永井遺跡は四国横断自動車道路建設時の調査によって、県下でも有数の縄文遺物の包蔵地であることが確認されていた。今回の調査でも普通寺市内の縄文文化解明に大きな期待が寄せられたが、遺物は各時代のものが確認されたものの遺構は弥生時代から中世頃の自然流路や水路ばかりであり、直接生活の痕跡を示すような遺構は検出されなかった。

条里方位を示すSD-01以外の溝は、大半が調査地南東側の微高地方向から北西の低地に向かうことから、検出された遺構群に伴う集落域は調査地の南東側に広がる微高地にあり、この場所にこれらの水路を必要とした人々の生活の場があったことが伺われる。

しかしながら、調査地周辺の水田中に散布する縄文時代から弥生時代、古墳時代から中世までの各時代の遺物は多く、様々な時代の溝が検出されたことを考え併せると、この地の周辺部に古代の人々の生活が長い時代に亘り連續と存在していたことは疑いようのない事実である。

また、縄文時代後期から晩期にかけての遺物は、永井遺跡の他にも彼ノ宗・九頭神・稻木石川・五条など市内の至る所で発見されており、大規模な縄文遺跡が市内に広がる可能性が高いと考えられる。

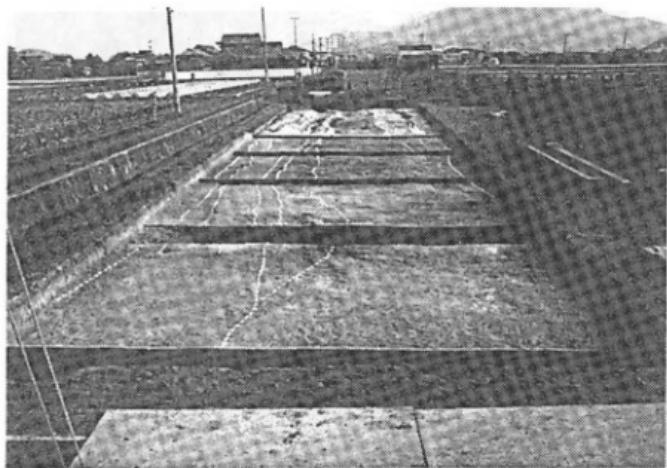
従って、得られた断片的な資料がいずれ繋がることを願いつつ、今後も地道な調査を続けて行きたいと思う。



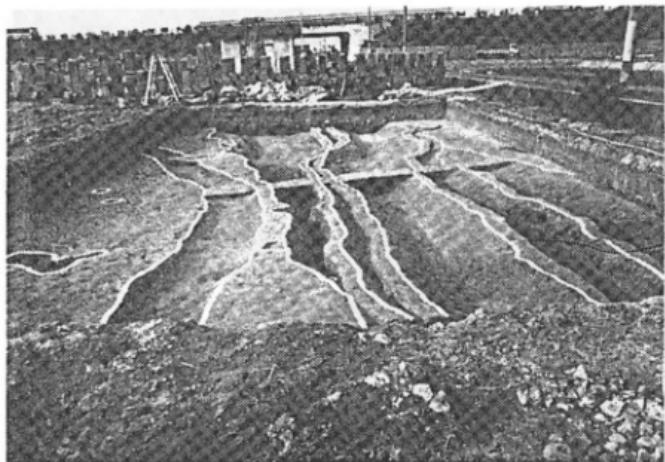
第9図 調査区全景(南から)



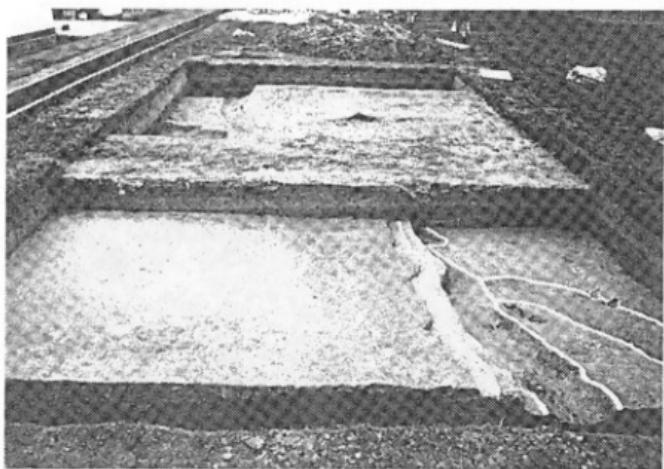
第10図 発掘調査作業風景(第1調査区全景・北から)



第11図 第1調査区全景(北から)



第12図 第2調査区全景(南から)



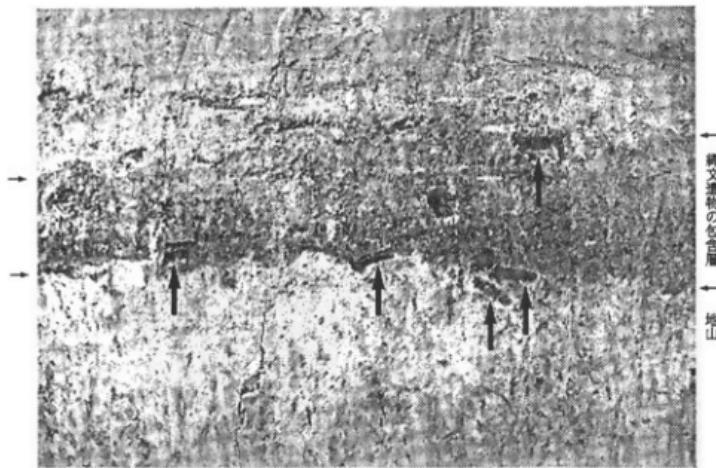
第13図 第3調査区全景(南から)



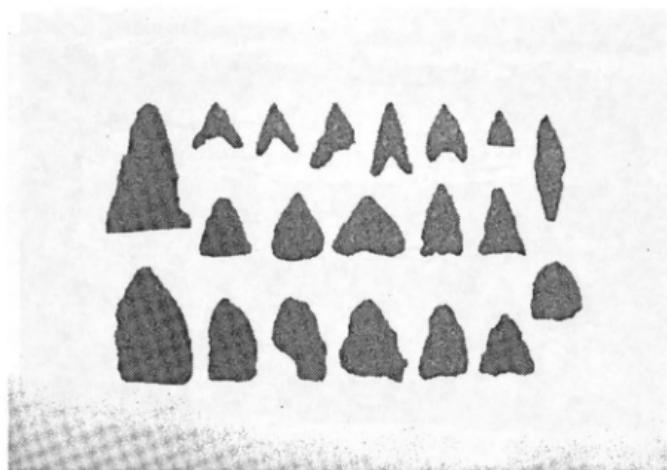
第14図 第4調査区全景(南から)



第15図 SD-01とSD-01' 土層堆積状況(第1調査区南壁)



第16図 地山上に堆積する縄文土器(第3調査区西壁)



第17図 第1調査区縄文包含層出土石鏃
(右上の石鏃の全長が3.5 cm)



第18図 第1調査区縄文包含層出土石鏃・刃器
(上段中央の刃器の全長7.0 cm; 下段左端は黒曜石)

永井遺跡発掘調査報告書

～都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

1993年3月27日 発行

編集発行 永井遺跡発掘調査団
香川県善通寺市文京町2-1-4

印 刷 四国工業写真株式会社